

ジュリアン・グリーン・グリーンの思春期

井上三朗

目次

- 一 はじめに
- 二 カトリシスムへの改宗
- 三 肉体的苦悩
 - (1) 裸体の絵とへ継続した物語▽
 - (2) 孤独の快楽
 - (3) 春画と『デカメロン』
 - (4) 自分のからだを眺める
 - (5) 眠っている人を眺める
 - (6) 彫像
- 四 へ大いなる拒絶▽
- 五 おわりに——他者の出現——

一 はじめに

ジュリアン・グリーンの生涯については、以前、『ジュリアン・グリーンの出発』と題した論考のなかで、誕生から母親の死に至るまでの、彼の子ども時代をしらべたことがあった。この成果を踏まえて、本稿では、グリーンの評伝のころろみの一環として、母親の他界ののち、ヴァージニア大学留学のためにアメリカに出發するまでの時期、つまり一九一五年一月ごろから、一九一九年九月までの彼の思春期を通観することにした。

まずはじめに、思春期のグリーンの外的な生の歩みを素描しておこう。グリーンは一九〇八年にリセ・ジャンソン^{II}に入学し、公教育を受けていたのであるが、一九一七年にリセの全課程を終了し、七月に第一次バカロレアの試験に合格する。ところが、時代は第一次大戦のさなかであり、一七年四月には、ついにアメリカ合衆国が参戦した。母国の参戦という情勢のなかで、父親はグリーンに、連合国軍のために役立つよう要請する。すでに三女のアンヌと四女レッタは、赤十字の看護婦として、戦争に参加していた。グリーンもまた、父親の意向に添って、リセを卒業後まもなく戦地におもむく。父の世話で、ハアメリカン・フィールド・サービス^V (American Field Service) という移動野戦病院の組織に加わったグリーンは、野戦病院車の運転手としてアルゴンヌの前線に向く。しかし規則では、十八歳未満の者は参戦できないことになっていた。グリーンは当時、十七歳であり、年少であることがわかって除隊となった。一九一七年十二月、今度は、ハアメリカ赤十字^V (American Red Cross) という衛生隊組織に所属し、イタリア戦線に身を投じる。一八年の六月まで、グリーンは約半年の間、従軍する。このかん、赤十字で活動していた姉のレッタが、過労のため胸を患い、世を去るといふ悲しい出来事が突発する。『開かれた千の道』のなかで、グリーンは、姉の訃報に接したときのことを、「数分のあいだ、私には人生がいかなる意味ももたないように思われた。(…)その知らせは憤慨をひきおこすもの、そう、憤慨をひきおこすものよ

うに思えた。なぜなら死は正しいことではなかったからだ」(V、九一〇頁)と顧みている。

さて、一九一八年六月、ハアメリカ赤十字Vを去ったグリーンは、当時、二番目の姉のマリーがいたローマにしばらく逗留してから、帰国する。九月に、フランス軍に志願し、フォンテーヌブロー砲兵学校に入隊する。一八年十一月、休戦条約が締結され、第一次大戦は終わる。しかしグリーンは砲兵学校にとどまり、教えを蒙る。そのあと、一九年一月から三月まで、占領軍のひとりとして、ドイツのザール地方などに駐留する。三月の末にパリにもどったグリーンは、数カ月の準備のち、第二次バカロレアを受験する。だが彼は理数科が苦手なため、試験に落ちたと思ひこみ、合格発表を見に行かなかった。そのため、実は合格していたことを知らなかった。ちょうどそのころ、アメリカ在住の母方の叔父、ウォルター・ハートリッジから便りがあり、ジュリアンをアメリカに招き、ヴァージニア大学で学ばせたいと申し出てきた。グリーンのお父親は、投機の失敗から莫大な負債をかかえていたので、叔父の誘いを承諾するようながす。グリーンはフランスを離れる気分にはなかなかならなかった。とはいえ、とうとう同意する。かくして一九一九年の九月、グリーンは留学のため、アメリカに旅立つことになる。

以上が、母親の死後、アメリカ出発に至るまでの、グリーンのお父親の人生の外的な歩みである。グリーンのお父親は、自伝第一巻『夜明け前の出発』の終わりの七十数頁と、第二巻『開かれた千の道』の全頁で回想されている。前者では、移動野戦病院車の運転手として前線に向かうまでの時期が、後者においては、従軍時代を経て、アメリカに立出するまでの時期があつかわれている。この二つの自伝を主な検討材料としつつ、私は以下において、まず、グリーンのカトリシズムへの回心を問題にする。次に、彼の肉体的体験を取り上げる。裸体の絵をかく行為とA継続した物語Vの遊戯を検討することで、幼年時代のグリーンの欲望の揺れ動きを一見したあと、孤独の快楽にふける行為、春画と『デカメロン』に出くわした体験、自分のからだを眺める所為、眠っている人を眺めるという行い、ならびに彫像を鑑賞するという体験を分析することによって、彼の肉体的懊悩を概観したい。それから、一九一九年四月のA大いなる拒絶Vに論及する。これらの手続きを経ることをつ

うじて、思春期のグリーンの内的な生が全体としていかなるものであったのかを、明確にすることを目指したい。さいごに、ヴァージニア大学留学時代の体験につながるものとして、一九一七年における他者の出現のことにもふれておきたい。

二 カトリシスムへの改宗

母親の死ののちの、グリーンの内的な生の歩みのなかで、一九二六年のカトリシスムへの改宗を、最初に指摘しておく必要があるだろう。まず回心の経緯を説明しておきたい。一九二五年の九月、父親の部屋で、アメリカ人のギボンズ枢機卿の本をたまたま目にとめ、精読したことが、回心の直接のきっかけとなった。この本は、改宗者のためにカトリックの教義を要約したものである。自伝『夜明け前の出発』において、グリーンはこのときのことを振り返って、「最初の言葉から最後の言葉に至るまで、これらの頁に書かれていることのすべてを、私は信じた。強く、よろこびをもって信じた」(V、八〇九頁)と述べている。かくしてグリーンはカトリック教徒になることに腹を固め、自分の決心を父親に伝える。すでにカトリックに回心していた父親は、息子をクレテ神父という人物に引き合わせる。グリーンはこの神父の導きによって、カトリック教会に帰依する。一九二六年の四月二十九日、洗礼の秘蹟がおこなわれ、その翌日に、グリーンは最初の聖体拝領にのぞんでいる。

グリーンの改宗の背景を考察することにしよう。グリーンがプロテスタントイスムを棄てる理由として、彼がフランスというカトリックの国で生活していたことが挙げられる。長老派教会の信者であった父親が、一九一五年の八月にカトリック教徒となったのは、また、父親に先立って、長女のエレオノール、次女マリーがカトリシスムに改宗したのは、彼らを取りまく環境のせいであつたにちがいない。母親でさえ、存命中は、カトリックの風土のなかで、回心への誘惑を抑えることができなかつた。霊的自伝『人間に必要な愛』(一九七八)によれば、グリーン之母は、「わたしはできることならカトリック

に生まれたかったのです」(Ⅵ、九〇六頁)と修道女に胸襟を開いていたという。母親は監督派教会に属しながらも、プロテスタントの教義をグリーンに教えることはなかった。母親にとって、「聖書と祈りだけで万事に十分であるはずだった」(Ⅵ、九〇三頁)ので、神学上の煩瑣な問題は顧慮の外に置かれた。このため、グリーンは改宗はならぬ困難をともなわなかったのである。

グリーンが回心する事情として、カトリックの風土に身を置いていたという点とともに、母親の死によって生じた心の空隙を視野に入れなければならない。グリーンにとって、母は幸福と安全と平和を与えてくれる存在であった。そんな母をうしなつて、グリーンはそれらを保証する新たな場所を探しもとめることを余儀なくされる。『夜明け前の出発』で、母が息をひきとつたあと、「家では、宗教の話をする人はもはや誰もいなかった」(Ⅴ、八〇〇頁)と、グリーンは書いている。たしかに、家には父親がいる。しかし、「父は、私の世界とはまったく無縁の世界で生きていた。私は父にたいして尊敬の念を大いにいだいていたが、父に言うべきことは何もなかった。(…)私は母には、一日に十度も『Love you』と言っていた。だが父には『Love you』と言ったことができたであろうか? 私たちは、ほとんど国がちがう人同士のように、互いに向かいあっていた」(Ⅴ、八〇八―八〇九頁)と回顧しているように、父親はグリーンにとって遠い存在であった。愛する人を亡くしたグリーンは、こころの空虚を満たすために、新たな拠り処を希求しないではいられなくなるのだ。

カトリック教会は、グリーンに新しい拠り処を提供する場としてあつた。自伝『開かれた千の道』において、グリーンは、「私には感じられるもの、目に見えるもの、息づいているものが必要だった。私の宗教はこんなふうだった」(Ⅴ、九六六頁)と言っている。生前、母の存在は、グリーンは宗教を生起させる基盤であつた。母親の逝去のちは、カトリック教会が彼の宗教を支える礎となる。『夜明け前の出発』のなかで、グリーンは、「教会^③は、私をこの世から保護してくれる見えな

い砦として、私の周りに建てられてるように、私は感じていた」(Ⅴ、八一六頁)と内省している。カトリック教会は、母親に代つて、「この世から保護してくれる見えな砦」の機能を果たしている。ユイターヴァールは、「回心の日、何より

もまず彼〔グリーン〕を惹きつけるのは、もはや神への愛ではなく、むしろ、われわれの世界から逃れたいという欲求なのだ⁽¹⁾と断じている。この世からの脱出願望がグリーンを回心へと誘導したとする見解は正しい。カトリック教会は、かつてこの世からグリーンをまもり、至福と安全と平和とをもたらした母親の役割をになうべきものとしてあつたのである。

グリーンを教導したクレテ神父のことについてふれておきたい。グリーンがこの神父の手引きで、カトリック信者となつたことはすでに述べた。神父は、文学と音楽が、魂を墮落させる危険性をもつとみなすほど潔癖な人であつた。道徳の問題についても厳格で、たとえば、「たとえ人びとを救うためであるとしても、一言の嘘もついてもはなりません」⁽²⁾〔夜明け前の出発〕V、八一七頁。強調はグリーン）とさとしてゐる。一九一八年一月、姉のレッタが昇天したとき、「開かれた千の道」で報告されているように、グリーンはクレテ神父に、「レッタはいま天国にいます」(V、九一一頁)と手紙で書き送る。これにたいして神父は、「彼女が救われていると希望することができるだけです」(九一一頁)と返事して、グリーンのを凍てつかせる。たとえ人が信仰を有していても、信仰は必ずしも救いの証しにはならないし、救われるかどうかは、最終的には神が決定するのであるから、せいぜいのところ、人間は自らの救いを期待することしかできない、と神父は考えるのである。クレテ神父はジェズイットの神父でありながら、いくらかジャンセニスト的な発想をする人であつたといえよう。

したがって、クレテ神父の世界観は当然のことながら、二元論的である。彼は神の国と地上の国とを峻別する。グリーンもまた、母親の性教育の影響のもとに、純粹志向を子ども時代から培い、魂と肉体、純粹と不純の対立に加えて、神の国と地上の国、善と悪、神と悪魔、それに目に見えないものと目に見えるものといった対立概念に立脚する世界観を早くから形成していた。クレテ神父との邂逅によつて、グリーンのかなかの二元論的世界観は揺るぎないものとなる。クレテ神父は神の国にグリーンを踏みとどまらせるために、別の言葉でいえば、地上に悪魔の誘惑にさらされないようにするために、グリーンにこの世を捨て、修道士になるようすすめる。神の国にそこがれるグリーンは、幸福と安全と平和を渴望するために、また、自らの救いを達成したいと切願するがゆえに、神父の提案に賛同する。グリーンがアングロ・サクソン系の血をひくの

で、英仏海峡に位置するワイト島の、ベネディクト派の修道院が選ばれる。もともと、修道士になる計画はただちに実行に移されるわけではない。この計画は長らく二人だけの秘密にされる。けれども一九一六年四月の回心以後、グリーンは修道生活をよるこびのなかで夢見ながら、日々を送ることになる。

三 肉体的苦悩

グリーンの修道生活への憧憬は、彼の二元論的世界観の必然的帰結と判じうる。とはいえ、二元論的世界観を内部にかかえることで、グリーンはかえって逆に苦渋に満ちた肉体生活を強いられる。この章では、思春期におけるグリーンの肉体的懊悩を概観したのであるが、その前に、子ども時代の欲望の揺れ動きに目を向けることにしよう。

(一) 裸体の絵とへ継続した物語

肉体の苦しみは、母の庇護のもとで比較的幸福であった幼年期に、すでに芽生えていた。ダンテの『地獄篇』に挿入された、ギユスターヴ・ドレの版画、ルルクサンブル美術館所蔵の、ルコント・デュ・ヌイの「凶報の使者たち」の絵、あるいはまた、ルーヴル美術館の、古代の裸体の彫像——これらのものに目を注ぐことをとおして、グリーンは目に見えるものの誘惑にさらされるとともに、人間の肉体美に開眼させられた。と同時に、性的な衝動に襲われさえした。人間の肉体美を表現した美術作品を鑑賞することは、グリーンにとって欲望の体験でもあった。そうこうするうちに、グリーンは人間の肉体をデッサンすることを覚える。グリーンは『夜明け前の出発』のなかで、ギユスターヴ・ドレの絵を紙の上に書き写した、六歳の頃の体験を、「ある日のこと、この裸体の群れを前にして、不意に感嘆の念にとらえられた私は、いきなり鉛筆を手にして、いちばん美しいと思える肉体のひとつを、不器用ではあるが、同時に力強い線でなぞった」(V、六七五頁)と語っている。グリーンはひそかに人間の裸体のデッサンをかくという習慣を身につける。同じ自伝のなかで、この習慣を思い起

こしながら、グリーンはこう綴っている。

「この秘めやかな世界（人間の裸体を描くデッサンの世界）は、私にとって、異常なよろこびの源泉であると同時に、けつして満たされるはずのない欲望を養っていた。というのも、その欲望は、人間に可能な範囲を越えていたからだ。それは肉体の夢であった。私は自分のうちに、さっぱり訳のわからない巨大な飢えをかかえていた。私は、自分が何を望んでいるのかも、それらのデッサンが何を意味しているのかもわからなかった。わかつていることは、それらを隠し、際限なくかき直すことは覚悟のうえで、それらを破棄しなければならぬということだけであった」（Ⅴ、七〇七頁）^⑦。

若干、難解な文章である。とはいえ、裸体の絵をかくことに、欲望のはけ口がもとめられていたことが確認できる。はじめに「この秘めやかな世界は、（…）異常なよろこびの源泉である」と指摘されている。この「よろこび」はまぎれもなく肉体的なものである。だがこのあと、「けつして満たされるはずのない欲望を養っていた」と記述されるように、裸体のデッサンはますます肉の欲望をつのらせる。「さっぱり訳のわからない巨大な飢え」という言い方は、グリーンのうちに宿る欲望の深さを際立たせている。グリーンは欲望にかられて裸体のデッサンを描くけれども、欲望はあまりにも深いので、描出された裸体は欲望をいやましこそすれ、充足させることはなかったということなのであろう。ともかく、裸体の絵をかくという所作から、幼年期のグリーンにおける欲望の揺れ動きを見てとることができる。

またグリーンは幼年時代、ひとりでいるとき、とりわけ眠る前、次々と人を殺す遊戯にふけていた。この遊戯は幾度も繰り返され、ひとつの長い物語をかたち作っていたので、グリーンはその遊戯をへ継続した物語（histoire continue）と呼んでいる。『夜明け前の出発』の中の一節を読むことにしよう。

「私は絶対的権力をもった人間であり、奴隷たちに命令をくだしていた。私の祖父は奴隷たちを持っていた。私も同様だった。みんなは私の前でひざまずいていた。私は善良であったが、なんの前触れもなく人殺しの激しい欲望の発作にかられることがあった。私は殺したり、殺させたりした。ひとりでいるとき、このように半狂乱におちいる瞬間は稀で

はなかつた。だが誰もこれについてはまったく知らなかつた。それは私の秘密だったのである」(V、七八三―七八四頁)

グリーンは夢想の戯れのなかで、奴隷たちを殺したり、殺させたりしている。そうすることによって、「人殺しの激しい欲望」を満足させている。おそらく、継続した物語Vの遊びは、六歳のときにルルクサンブル美術館で見た、ルコント・デュ・ヌイの「凶報の使者たち」の絵から着想を得たものと思われる。なぜならこの絵は、古代エジプトの国王ファラオの手によって斬殺された奴隷たちを描いているのだから。グリーンもまた、ファラオのように、偉大な全能の人間として、奴隷たちを殺害することを夢見ているのだろう。継続した物語Vとは、「殺人の物語」(『夜明け前の出発』V、七八五頁)であり、残忍な殺戮のゲームを強行させるものは、グリーンの内なる「はげしさ」Vである。グリーンは『夜明け前の出発』のなかで、子ども時代のこの遊戯を追憶しながら、こう反省している。

「私には、自分の性格のやさしさが、この精神的な遊戯の念入りな残酷さとほとんど折り合っていないなかつたことがわかる。しかしこの表面上のやさしさの下に、極端なはげしさが息つき、うごめいていたことを、私は認めないわけにはいかない。時が経って、こうしたことのすべては、私の小説のなかに入りこんだ」(V、七八五頁)。

グリーンは自分の中の「極端なはげしさ」(une violence extrême)に言及している。この「はげしさ」Vは、自伝『開かれた千の道』で、グリーンが「私の中には、すべてを荒廃させてしまうはげしさの基盤があつた」(九九四―九九五頁)と言うときの「はげしさ」(violence)と等価なものである。では、《violence》とは、いったい何なのであるうか。何よりもまず、それは欲望のはげしさである。グリーンが想像世界のなかで殺戮の行動に身をゆだねるとき、彼は自分の肉体の内部に宿る力、抑圧された欲望のエネルギーに牛耳られているように思われる。肉体の力、欲望のエネルギーが突如、噴出して、殺人行為に駆り立てているとうけとれる。グリーンは、「こうしたことのすべては、私の小説のなかに入りこんだ」と認めている。作中人物たちの殺人・暴力行為のすべては、内なるviolenceの発現であり、彼らの内部で抑えつけられた欲望ない

し情熱の結実にはかならない。

△violence△は、純粹志向とのかかわりで把握することもできる。純粹志向を有する人間が欲望をかかえるとき、彼は同時に自らの欲望とたたかわなければならぬ。たたかひの過程で、欲望の対象を殺したいという欲求もまた、必然的に生じる。後年の小説『モイラ』のなかで、熱狂的な信仰に燃え、純粹志向をつらぬく主人公のジョゼフが、そうとは知らずに、自分の執着しているプレローとの格闘の際、相手を絞め殺そうとするのは、そのためである。ジョゼフにおける欲望とは、「人殺しの激しい欲望」でもある。純粹志向をもつグリーンの△violence△とは、欲望のはげしさを指し示すとともに、欲望とのたたかひのはげしさでもあり、欲望の対象を殺害したいという欲求のはげしさをも含意する。もつとも、△継続した物語△の戯れのなかで、欲望の対象はつきりとした輪郭をとらない。幼いグリーンは不特定の人物を殺害して楽しんでゐる。しかし焦点の定まらない欲望と、無差別な殺戮への欲求とが渾然一体となつてゐる。△継続した物語△を産み出す△violence△の意味を勘案するならば、これはごく当然の成り行きだと肯ける。

裸体の絵をかく行為と△継続した物語△とを検討することによつて、子ども時代のグリーンの欲望の揺れ動きを一瞥した。肉なるものは、すでに母親の存命中から、グリーンを魅惑していたのである。

(2) 孤独の快楽

母親の死去ののち、グリーンはいよいよ肉なるものに魅せられることになる。リセの学友のひとりから、自らの手で肉体の快楽を得る方法を教えられ、教えられたとおりのことを実行するという出来事は、このことを端的に示している。この出来事は、母が絶命してまもない、一九一五年のはじめに生起した。グリーンは『夜明け前の出発』のなかで、自らの犯した過失を、次のように告白している。

「私は漠然と、茫然自失におちいり、眩暈に襲われたひとときの思い出を保ちつづけていた。こののち、自分の人生に以前と以後とが存在するようになり、自分のうしろに、十七世紀の或る作家が△失われた国△と名づけたものを持つ

ことになるとは、思つてもいかなかった。人間的にその行為と絶縁することは不可能であった。その行為を繰り返すことは、もはや時間の問題でしかなかった」(Ⅴ、八〇二頁)。

グリーンは孤独の快楽を獲得した行為を、「以前と以後とが存在するようになり」と認知しているところからわかるように、自分の人生において転換点をしるすような事件であったと総括している。また、「自分のうしろに、十七世紀の或る作家が失われた国Ⅴと名づけたものを持つことにな」つたと断言しているごとく、その行為を失樂園の体験になぞらえている。ここで、母親の存在の大きさを再確認することができる。母が生存しているとき、グリーンはこのような罪を犯すことはなかった。母は、幼いグリーンが局部に手を置いてのを見て、パン切り包丁を振りかざし、「それをちよん切つてやるから」(Tri cut it off)とおどかさすほど、肉体の問題について峻厳な人であった。このような母親にまもられて、子ども時代のグリーンは樂園にいた。一九七〇年の『日記』のなかで、グリーンはこうしたためている。

「燃える剣を持つた天使によつてまもられた地上の樂園。私の子ども時代は、天使によつてまもられた樂園でもあった。天使とは私の母であった。そして母が手にもつ燃える剣とは、母がそれで脅し、蠟燭の光が劇的な輝きで光らせていた長いパン切り包丁であった」。

グリーンは子ども時代を「地上の樂園」と規定し、パン切り包丁を持って△Tri cut it off△と脅すことのあった母親を、守護天使に擬している。しかしながら、母親という守護天使を亡くした途端、グリーンは孤独の快楽を知ること、樂園の外に出る。先の引用文のおわりに、「その行為を繰り返すことは、もはや時間の問題でしかなかった」とあるように、こののち、グリーンは罪ある行為を反復することになる。『夜明け前の出発』のなかで、グリーンは一九一六年の夏の、すなわち、カトリックに回心してから数ヵ月後の思い出として、次のような体験を想起している。

「ある日、私はベッドの上の方にかかっている十字架をはずし、扉に突つかかる雄羊のように胸をどきどきさせながら、禁じられたことをした。それは、今や私の知っているとこよれば、その場でもし私が死ぬとしたら、たちまち私を

地獄へと突き落としかねない行為だった。私は死ななかつた。だが行為がおわると、耳もとで血を高鳴らせるような恐怖をいだいた」(V、八三八頁)。

孤独の快楽を享受するという行為が、ここでは、明確な罪意識をともなっている点に、注意を払う必要があるだろう。グリーンは罪意識は、行為の直前に彼が十字架をはずしていること、また、自分がなそうとしていることが、「その場でも私が死ぬとしたら、たちまち私を地獄へと突き落としかねない行為」であると承知している点から容易に見てとれる。行為のあと、グリーンがとらえられる「恐怖」の念からも、それは窺知できる。グリーンは、孤独の快楽を味わうことが罪を犯すことであると、はつきり認識しながらも、行為を繰り返さないではいけない。禁じられた罪であるを知りつつも、再び肉の快楽にふけらないではいけない。ここから、肉なるものに呪縛され、苦悩を深めるグリーンは姿がくつきりと浮び上がってくる。

(3) 春画と『デカメロン』

グリーンは一九一六年の八月、休暇で、イタリヤのジェノヴァに旅行した折に、肉なるものの誘惑をうけている。ジェノヴァには、当時、いちばん上の姉エレオノールが住んでいた。グリーンはこの姉のもとに数週間滞在する。そのかん、彼は二つの重要な体験をしている。一つは、エレオノールの知人である、クレイヤー夫人の家の書齋で、春画に目をやるという体験である。グリーンは姉とともにクレイヤー夫人の別荘に泊まつたとき、眠れないため、書齋にしのび込み、男女の性のいとなみを描いた、エロチックな版画をさがし出し、盗み見る。「夜明け前の出発」のなかで、そのあとの心の動きは、こう叙述されている。

「その部屋〔書齋〕を出るとき、私はふるえていた。欲望が、分析することのできない恐怖に混じりあっていた。それらの版画が私に見せたものは、不安な姿勢をした狂人たちでしかなかった。ふだんは服を着ていて、分別のある大人たちが、突然裸になって、精神病院の患者のようにふるまっているのを、私は発見したのである。私じしんも、彼らと同

じことがして見たかった。すると、そう思うことで、屈辱感が生じた。なぜなら、これまで私は、自分をほかのすべての人間とは別だと考えていたのに、実はその氣違ひじみた人間たちと同じであることがわかったからである」(V、八五四頁)。

グリーンは、男女間の性行為を活写した版画を目の当たりにして、「欲望が、(…)恐怖に混じりあつていた」と認めているごとく、罪を感じたことに由来する「恐怖」を覚えつつも、「欲望」にとりつかれている。「私じしんも、彼らと同じごとくして見たかった」と思っているように、性の快楽を漁る大人たちのようになりたい欲求をいだいている。今まで、グリーンは、純粹であるがゆえに、他の人たちより優位に立っていると自負してきた。しかし版画に目を奪われていることによつて、グリーンは、肉欲のとりこになった大人たちと同列に在ることを悟り、屈辱を感じる。ここにおいて、肉なるものによつて、魅了されたことの苦しみを読みとれる。このあと、自分の部屋にもどつたグリーンは、欲望に翻弄されて、白い紙の上でスケッチをはじめ。子どもの頃、ダンテの『地獄篇』の中の、ギユスターヴ・ドレの版画を見ながら、美しい肉体を書き写したように、性の交わりを結ぶ男女の絵をかくことに没頭する。グリーンはこのときのことを思い出しながら、「私は自分の思い浮かべるものを、幻視家が幻を見るように、目にするのだつた」(V、八五六頁)と打ち明けている。エロチックな版画の記憶が生々しく脳裡に焼きついているグリーンは、「幻を見る」ほどまでに、強烈な欲望の餌食になっている。デッサンをする行為から、クレイヤー夫人の家の書齋の春画が、グリーンにいかに大きな衝撃を与えたかがたしかめられる。ジェノヴァ滞在中の、もうひとつの重大な体験は、ポッカチオの『デカメロン』に遭遇したことである。グリーンは、イタリアに持参してきた自分の本だけでは飽きたらず、エレオノールのアパルトマンにあつた、ポッカチオの翻訳書を偶然見つけ、通読する。この思い出は『夜明け前の出発』において、次のように喚び起こされている。

「もし『デカメロン』が悪書であるならば、それは私の目に入った最初の悪書であつた。その本が私におよぼした害は、ほとんど計り知れない。この世でもっとも望ましいものとして描かれている肉の快楽は、たちまちのうちに私のなかで

反響を見だし、宗教の声をかき消してしまつた。ワイト島は私の視界から姿を消し、その代わりに、十五世紀風の衣裳をつけた若い男女が、果樹園の芝生の上でころび回るといった、取りとめもない夢想が現われた。快樂！物語のなかにあまりにもひんばんに出てくるこの言葉は、そのたびに、私の頬を紅潮させた」（Ⅴ、八五〇頁）。

グリーンは『デカメロン』を一読して、自分のうちに、「宗教の声をかき消してしま」うほどの「反響」を聞き取つてゐる。この書物の、肉の快樂への讃歌が、グリーンを宗教からひき離してゐる。そして「ワイト島は私の視界から姿を消し、その代わりに、（…）取りとめもない夢想が現われた」と書かれてゐるように、グリーンの内心中で芽生えた、快樂への夢想、地上的なものへの憧憬が、ワイト島での修道生活への思い、神の国へのあこがれを完全に覆い隠し、忘れさせる。グリーンにとつて、ポッカチオの読書は、宗教⇨神の国との乖離・離反をひき起すほどの、この世⇨肉なるものの、あらがいがたい誘惑を意味したのである。

（4）自分のからだを眺める

肉なるものの魅惑は、『開かれた千の道』の中の、自分のからだに見とれる挿話からも觀察される。一九一八年の二月、ヘアメリカ赤十字Vという衛生隊の組織に加わつて、イタリア戦線に遠征する途中、グリーンは、始めて自分のからだを鏡にうつして眺めるという体験をしている。

「ある晩、夕食後、部屋にもどつたとき、自分の裸体を洋服箆の鏡にうつして眺めようという奇妙な考えが、にわか
に心に浮かんだ。（…）この思いつきは、突然ひらめき、服を脱ぎながら、自分が過ちを犯しつつかつあるのだということ
を、私ははつきりと確信した。（…）」

すっかり裸になつたとき、私は大胆にも鏡のほうに目を向けた。すると恐れは消えうせた。周囲にただよう恐怖のよ
うなものあとに、大そう深い静寂がつづいた。生まれてはじめて、私は人間の裸体を見た。そしてその人間とは私だつ
た。不思議なよろこびが私のからだ全体をとらえた。私は、自分がぼつそりとしてゐるが逞しいことを見てとつた。し

かしそれはほんの一瞬でしかなかった。というのも、私は抵抗しがたい力によって前に身を投げ、ほぼからだ全体を鏡にびったりとくっつけたからである」(V、九一五—九一六頁)。

グリーンは鏡の中の自分の裸体に視線を注いでいる。この所行が肉の誘惑に屈した結果であることは、グリーンが服を脱ぎつつ、「自分が過ちを犯しつつあるのだ」という確信をいだいている点から明白である。グリーンは、罪悪感に由来する「恐れ」(craines) ないし「恐怖のようなもの」(l'espece de terreur) を感じたあと、鏡にうつった自分の裸体を凝視して、「不思議なよろこび」にとらえられる。この「よろこび」が肉体的な歓喜であることは、疑いを容れない。欲望がいくらか充足されたことで、グリーンは「よろこび」を味わうのである。つづいてグリーンは「抵抗しがたい力」(une force irresistible) に支配されて、鏡のほうに身を投げる。この「抵抗しがたい力」とは、彼のうちに潜在する肉体の力、欲望のエネルギーである。その「力」があまりにも強大で、自分を越えたもの、他人のもののように知覚されるために、「抵抗しがたい」とも化するのである。グリーンは鏡の中の肉体に身をすり寄せる。そして、ベッドの中で、「私の心をもつともかき乱し、記憶から消し去ることができなかつたのは、自分の唇を自分の唇の上に重ねたということだった」(九一六頁) と思ひ浮かべているように、鏡にうつった自分に接吻する。これらの挙動から、ナルシシズムの動きを見てとることは、もちろん可能である。けれども、グリーンの内心では、肉体が敵視され、禁じられたものになるがゆえに、自らの肉体すらが、自己から遊離・独立し、△ものV(ouïs)として魅惑の力をふるい、欲望の対象となってしまうことを、まずもって読みとるべきである。約言すれば、グリーンにおいては、純粹志向のせいでも、自己のからださえもが、肉なるものにいざなう、恐るべき△ものVへと変容するのである。

(5) 眠っている人を眺める

自分のからだを眺めることと同様に、眠っている人を覗き見るといふふるまいもまた、肉体的な体験となる。一九一八年の春、イタリヤのロンカード (Roncade) という所に駐在中、自分と同じくヘアメロカ赤十字Vに属する、ジャックという

名の青年と、グリーンは知りあう。ジャックは長老派教会の牧師の息子で、ギリシア語で新約聖書が読める、美しいからだをした若者である。グリーンはこの若者と二人きりで話すこともあった。そんなある朝、グリーンは早く起きて、まだ部屋でひとり眠っているジャックを、開いたドアから盗み見る。『開かれた千の道』で、次のような件りを見いだすことができる。

「私はドアの敷居の上でじっとしていた。心臓がどきどきと動悸を打った。眠っている人のほうに身を傾け、眠っているせいでふだんよりいっそう赤く染まっている彼の頬の上に、自分の頬を置きたいという気持ちは、奇妙な欲求ではなからうか？ 枕の上にひろがった、全体が金色の髪と、曲りくねった細長いからだの力強い線とによって、彼〔ジャック〕はとても美しく見えたので、私は恐怖の入り混じったよろこびを感じるのだった。だが私にはよろこびも、恐怖も説明することができなかつた」(V、九一九頁)。

グリーンは、眠っているジャックを目撃して、「彼の頬の上に、自分の頬を置きたい」欲求にとりつかれている。この欲求はまぎれもなく肉体的欲望の一つを形成する。ジャック・プチはこの場面を、「不可能な所有の代替物」であると解している。たしかに、眠る人を眺めるとい行いは、性の交わりのように、欲望の対象を所有する行為に代わるものだと受けとれる。なぜなら、眠る人は、魂を持たないへものVと化すがゆえに、自由に、好きなように觀賞することができ、思う存分、欲求を満たすことができるからである。グリーンは眠っている若者に見とれながら、「恐怖の入り混じったよろこび」(une joie mêlée de frayeur)を感じている。このあと彼は、「私にはよろこびも、恐怖も説明することができなかつた」と振り返っている。しかし「よろこび」が肉体的な次元にあり、「恐怖」が罪意識、禁じられたことをなしているという自覚に源を発していることは、言を俟たない。グリーンは罪悪感をいだきながらも、肉の欲望を発散させている。このように、眠っている人は、自分のからだと同様に、グリーンを肉なるものに招き寄せるものとしてあるのである。

ところで、眠る人に目を据える場面は、グリーンの創作作品においても認められる。たとえば『もうひとつの眠り』(一)

九三〇)のなかで、語り手ドゥニは、十歳の頃、ひそかにあこがれる従兄クロードの、睡眠中のところを注視した思い出を喚起している。ドゥニは、母に連れられて、従兄とともにシャントルーの別荘に休暇をすごしに行く。最初の日、不眠の夜を明かしたドゥニは早朝、隣室の部屋で、片脚をシーツからはみ出させて眠っているクロードの、ギリシア彫刻のようなからだを、鎧冑のすきまから、飽くことなく眺める。そして「悲しみ」とともに「快感」(plaisir)を覚えている(Ⅰ、八三〇頁)。ドゥニの「悲しみ」は、従兄への思いが報われぬこと、とれだけ身近にいても、従兄が遠い存在になることの直観に起因するだろう。しかしそれでもクロードの寢姿に目を凝らすことによつて、ドゥニは叶わぬ欲望の埋め合わせをし、「快感」を味わうのである。

『真夜中』(一九三六)のヒロインの少女もまた、類似の体験をしている。作品第三部で、エドム氏のフォンフロワドの館に住むことになった、女主人公エリザベートは、ある夜、館の中を探索する。一つの部屋のドアが開いていたので、中に入つてマッチの火をつける。すると、類い稀な美しさをたたえた若者が眠っているのが目にとまり、動揺する。エリザベートは「自分の身を震わせているのが、よろこび、不安な、胸をひき裂くようなよろこびであるのか、それとも、この上もなく奇妙で甘美な苦しみであるのか」わからない(Ⅱ、五五六頁)。彼女が覚える、「よろこび」(joie)と「苦しみ」(douleur)の交錯した感情は、肉なるものの誘引に直面したときの二律背反的な反応だと解せる。事実、このあとエリザベートは、「無邪気な官能」に刺戟されて、眠っている若者の肉体に——顔と膝と脚とに、指先でさわっている。

このように、眠る人を眺めるといふ挿話は、小説でも見いだされる。この挿話は、一九一八年春のグリーンじしんの体験の変奏だとみることができ。就寝中のジャックを凝視した思い出は、衝撃的な事件として、長らくグリーンを脳裡に、鮮明にのこつたのである。

(6) 彫像

思春期のグリーンにおいて、肉なるものの魅惑の力をとりわけ行使するのは、彫像である。幼い頃、グリーンは、母に連

れられて行つたルーヴル美術館の、裸体の彫像を鑑賞して、性的衝動に見舞われたことがあつた。母の死後、人間の肉体美を表現する彫像は、ますますグリーンを懊悩のなかにおとしられる。例をあげれば、一九一九年、第二次バカロレアの試験を受けたあと、グリーンはルーヴル美術館を訪れ、古代ギリシアの神々の彫像を見る。『開かれた千の道』のなかで、この折のことが問題にされている。

「その大理石の彫像の周りをまわりながら、それらを見上げたとき、なんと恐ろしい衝撃が私の胸を揺さぶつたことだろう！ 彫像は苦痛をもたらし、私のからだの前全体に、その意味はわからないが、私がようやく知りはじめたばかりの、火傷の痛みのようなものを生じさせた。これらの神々は平然としている。だがそれらを前にして、なんと苦しんだことだろう！ その苦しみの中には、なんと奇妙なよろこびがあつたことだろう！ 苦しんでいた。それでいて苦しむことをやめたくなかつた。踵を返しては、またもどるのだった。こうしたものを眺めているところを誰かに見つけられるおそれがあるので、好機をうかがう必要があつた……今だ、今だ、誰もいない。再び陶酔し、苦しむことができる。だが捕えられている。もう全く自由がない。こうしたものすべては石でできているにすぎない。しかしそれは魅惑するのだ」（V、一〇二三頁）。

グリーンはギリシアの神々の像にすっかり魅せられている。「捕えられている。もう全く自由がない」とか、「しかしそれは魅惑するのだ」とかいった文章は、グリーンが神々の肉体の美しさに、目と心を完全に奪われている状態をありありと示している。グリーンは彫像から目をそむけようとしても、彫像がふるう魅惑の力のために目を離すことができない。どうしようもなく彫像に惹きつけられてしまう。グリーンははじめのほうで、「彫像は苦痛をもたらし」云々とか、「だがそれらを前にして、なんと苦しんだことだろう！」とかいったように述懐している。彼はギリシアの神々の裸身の彫像を前にして、苦悩を深めている。なぜグリーンは苦しむのか。言うまでもなく、裸体が罪の觀念と結びつき、裸体に目をやるのが、罪深いものと認識されているからである。けれどもグリーンは、「苦しんでいた。それでいて苦しむことをやめたくなかつた」

と本心を吐露しているように、苦しむことを欲している。というのも、「その苦しみの中には、なんと奇妙なよろこびがあったことだろう！」と告げているごとく、見ることは苦しみをともないながらも、「奇妙なよろこび」(bizarre plaisir)を味わせてくれるからである。グリーンは二番目の文のなかで、自分のからだの前に「火傷の痛みのようなもの」を感じた、と言っている。この「火傷の痛み」は、肉体的な欲望に彼が刺戟されたことを証^{あか}している。グリーンは誰にも見つからず彫像を眺められる機会を見いだしたとき、「今だ、今だ、誰もいない。再び陶醉し、苦しむことができる」と思索している。罪意識と一体となった苦しみを代価として支払うことで、ひそかに感覚の陶醉を汲みとろうとする姿勢が、グリーンのかなにはあるのだろう。この姿勢は、自分を苦しめ、苛みながら、快楽を享受しようとする態度なので、自分にたいして發揮される一種のサディスムだと解釈できるかもしれない。いずれにせよ、彫像に目を向けることは、グリーンにおいて、きわめて苦渋にみちた肉体的体験となるのである。

グリーンは一九一九年九月、留学のため船でアメリカに旅立つ途中、ナポリに立ち寄る。彼はナポリ国立美術館で、裸身のナルシスのブロンズ像を目にする。「開かれた千の道」のなかで、そのときの印象が思い返されている。

「それ〔ブロンズ像〕は私を憤慨させた。言葉は強すぎるということはない。私はまずはじめに、その像のなかに何か恐るべきものを認めた。次いで、表現することができないような仕方、それは私を惹きつけた。人はその像を無害だと思ひ、デッサンの教室に持ちこんで、全く無邪気な五十人の生徒に模写させることができる。けれども、見るすべ心得ている者にとつては、その像には、墮落をもたらし、恐ろしいほどの力がひそんでいるのだ。恐怖の入り混じったよろこびをいだいて、私はほんとうに悪魔のような、その像の周りをまわった。私は、かつてこの世で人が魅惑されたことがなくらいに魅惑されていた」(V、一〇二八頁)。

グリーンは裸身のナルシス像を面前にして、「恐怖の入り混じったよろこび」(une joie mêlée d'horreur)を覚えている。この「恐怖」が、裸体を見ることへの罪悪感と絡みあった感情であることは、ことわるまでもない。ここでもグリーンは苦

しむこととひきかえに、肉体的な快楽をいくらか得ている。しかしながら、この一節では、先の引用文におけるほど、積極的・能動的に感覚の陶醉を楽しもうとする姿勢は観取されない。逆に、「それは私を憤慨させた」という最初の文が示すように、肉なるものへの反撥のために、ナルシスから目をそむけようとする心の動きのほうが強いように思われる。「私はまずはじめに、その像のなかに何か恐るべきものを認めた」という三番目の文からも、ナルシス像を忌避する構えがかいま見える。同様に、「見るすべを心得ている者にとつては、その像には、墮落をもたらず、恐ろしいほどの力がひそんでいるのだ」という評価からも、ナルシスを見るのが悪であり、危険な誘惑であるとグリーンが知悉していることがうかがえ、反撥の気持ちが見てとれる。しかしながら、グリーンはナルシス像に反撥しながらも、ナルシス像はその悪魔的・地獄的な美しさによって、彼を惹きつける。忌避・反撥の感情に正比例して、意識のなかではナルシス像の美しさがひき立ち、像は誘引の力をいやます。「私は、かつてこの世で人が魅惑されたことがないくらいに魅惑されていた」というさいこの文は、グリーンが抵抗できないかたちでナルシス像に魅せられてしまっているありさまを、的確に表現している。ナポリ国立美術館における、裸身のナルシスのブロンズ像の鑑賞は、この上もなく苦しい肉体的体験の一つであったのである。

裸体のデッサンをかく行為、およびへ継続した物語Vの戯れの検討をつうじて、幼時のグリーンの欲望の揺れ動きを瞥見したあと、五つの行為あるいは体験を吟味することをとおして、母親の他界ののちの、グリーンの肉体的苦悩を一覧した。第一に、孤独の快楽にふけた体験、第二に、春画を見、『デカメロン』を読んだ体験、第三に、自分のからだを眺める行為、第四に、眠っている人を眺める行為、第五に、彫像を見た体験である。思春期の肉体的体験は、まだほかにもある。

『開かれた千の道』において、グリーンは、「怒りのなかには快楽がひそんでいる」(V、九九五頁)と知らせながら、一九一九年、占領軍に加わりドイツに遠出していた頃の思い出として、ある見習い士官と取っ組みあいのけんかをし、肉体的欲求をひそかに満たしていた体験を取り上げている。これらの肉体的体験は、肉なるものものとりことなった、欲望の人間とし

てのグリーンの姿を浮き彫りにしている。

四 へ大いなる拒絶▽

このように、思春期のグリーンは、修道生活を夢見ながらも、肉なるものに魅惑され、苦悩を深めていく。『開かれた千の道』で、グリーンは従軍時代を振り返り、「私は同時に、この世と天国とを望んでいた」(Ⅴ、九三一頁)と打ち明けている。この言葉は、当時のグリーンが置かれていた状況をうまく言い表わしている。神の国にあこがれつつも、地上的なものに愛着するという状況である。同じ自伝のなかで、グリーンは、「私は同時に、ギリシアの神にもカトリックの聖者にもなりました」(Ⅴ、九二四頁)とも披瀝している。「ギリシアの神」とは、地上的なよろこびを享受する存在のことである。「カトリックの聖者」とは、神への愛のために、世俗的なものへの執着を断ち切った人間である。したがって、この文からも、この世的なものへのこだわりと天上的なものへの憧憬とを両立させたいという切なる願いが読みとれる。けれども「カトリックの聖者」になるためには、地上的なよろこびを断念し、「ギリシアの神」であることをあきらめなければならぬ。逆に、「ギリシアの神」であるためには、神の国へのひたすらな希求と、「カトリックの聖者」になる夢とを思い切る必要がある。同時に両者になることは、実際には不可能なのである。それゆえ、引き合いに出した二つの文からは、グリーンが二つの要求——肉体の要求と魂の要求とにひき裂かれて、苦しみの日々を送っていたことがうかがえる。

こうした中で、グリーンはついに修道生活へのあこがれを捨て去る。ワイト島のベネディクト派修道院に入る計画を放棄する。グリーンはこの放棄を、へ大いなる拒絶▽(Grand refusal)と名付けているが、これに先立って、二つの看過できない出来事が相次いで発生していることを指摘しなければならない。一つは、一九一九年の三月、占領軍のひとりとして、ドイツのザール地方にいた頃、「人間に必要な愛」のなかでグリーンが思い起こしているように、「自然の目覚めの前触れである

徴候のすべて」に魅せられ、「地上の美しさに眩惑され」たことである（Ⅵ、九二七頁）。「これまでこの世」は、「逃げ出すべき場所ではなかった」（Ⅵ、九二七頁）のに、グリーンはザール地方の自然に接して、地上の国の魅力を知るのである。

もうひとつの出来事は、パリにもどつてから、コンサートでベートーヴェンの「第九交響曲」を聴いたことである。「開かれた千の道」では、グリーンはこの音楽によつて、「この世には、教会の安心させる声とは別のものがあり、世界は自分が思っていたよりも広い」（Ⅴ、一〇〇三頁）ことを思い知つたと伝え、この世の神秘に触れて、「不思議な高揚が私の不安に混じりあつていた」（Ⅴ、一〇〇三—一〇〇四頁）と告白している。一九三九年の『日記』のなかでは、「ひとつの新しい世界の啓示¹²」をうけたと語り、教会の教える、神の国とは別の世界が存在することがわかつたと述べている。なるほど「第九交響曲」は、宗教的な音楽とみなせるかもしれない。しかしグリーンは、「私が軽蔑するよう学んだ地上は、この世から隠通しようと思つていただけになおさら美しく、魅力あるもののように思われた¹³」と追想しているように、ベートーヴェンの音楽をとおして、地上の国にますます魅惑されるのである。

この二つの出来事がへ大いなる拒絶Ⅴの直接の引き金となつた。しかしながら、その背景として、すでに見たように、母の死後、グリーンが肉なるものに魅せられて生きてきたことを挙げる必要があるだろう。肉体的なものへの断ちがたい思いが、へ大いなる拒絶Ⅴの要因であると推察されるのだ。事件は一九一九年の四月、コルタンベル通り¹⁴の教会の地下礼拝堂でのミサに列席した帰りに、突然起こつた。まず一九四一年の『日記』の記述を読むことにしよう。

「地下礼拝堂の階段を上がつているとき、私は一瞬、ある段の上で歩みをとめた。自分が捨てようとしていたこの世と、この世が与えることができるかもしれないのに、修道院に引きこもるために自分が拒んでいる一切のものを思つて、悲しみに胸があふれたからである。この瞬間に私のなかで何が起こつたかは、神のみが知る。突然、私のうちでへ大いなる拒絶Ⅴという言葉が言い表わされるのを感じた。その拒絶は私の人生にじつに特殊な外観を付与するはずであつた。同じ瞬間に、巨大な重みが私から取り除かれた。十字架の重みであつた。

その瞬間、私には、地上全体が自分に差し出され、中世のよ・うな・ものから出・て、ルネサンスの真・つ・た・だ・中・に・た・ど・り・着・いた・よ・う・に・思・わ・れ・た。通りに、田舎風の美しさをもち、春にすっかり浸されたあの通りに出たとき、私は、自分の人生が新しい方向を取りはじめたことを、はつきりと感じた¹⁴。

グリーンはへ大いなる拒絶Vによって、「中世のよ・うな・ものから出・て、ルネサンスの真・つ・た・だ・中・に・た・ど・り・着・いた」ような印象をいだいている。中世の世界とは神中心の世界であり、ルネサンスの世界とは、人間中心の世界であるのだから、グリーンは神の国から人間たちの国に移行したと推断できる。人間たちの国は地上の国と言いかえることができるので、彼は地上の国の真ん中に身を置くことになったともいえる。最初の段落で、グリーンは、「この世が与えることができるかもしれないのに、修道院に引きこもるために自分が拒んでいる一切のものごと」に、思いをはせている。問題となっているのは、地上的・肉体的な幸福である。グリーンはこの世的なよろこびに執着するために、修道院に隠棲することを拒否する。彼はへ大いなる拒絶Vののち、霊的なものが支配する神の国を出て、肉体的なものが優勢を保つ地上の国のただ中に突入することになるのである。

同じ出来事は、無論、自伝においても取り扱われている。今度は、『開かれた千の道』の中の文章を引くことにしたい。

「神を捨てるということは問題ではなかった。だが私は中間の道、狭くも広くもない道をもとめていたのだ。しかしそんな道は存在しない。なぜなら、それは実際には広い道でしかなく、悪魔が私たちに狭い道、理にかなった狭い道と思わせているだけだからだ。ああ神よ、私たちの住む通りである、落ち着いた家々と小さな庭が沿う、あの田舎風の小さな通りに出たとき、私はなんとという恐ろしいよろこびに胸を満たされたことだろう！」(V、一〇〇五頁。強調はグリーン)。

グリーンは自伝のなかでは、「狭くも広くもない道」としての「中間の道」を歩みたかったがゆえに、修道生活を断念したのだと判じている。へ狭い道Vとは生命・救いに至る道であり、へ広い道Vとは滅びに至る道のことだと思われる¹⁵。だが

「中間の道」は、実際には「広い道」でしかなく、「悪魔」が「理にかなつた狭い道」と思わせているものにすぎないと省察している。ここから、△大いなる拒絶▽は、自伝執筆の時点において、悪魔の誘惑に負けた結果であると理解されていることがわかる。地下礼拝堂から通りに出たとき、「私はなんとという恐ろしいよろこびに胸を満たされたことだろう！」と追憶している。この「恐ろしいよろこび」(joie terrible)とは、神から離れて、地上での自由を獲得したことに立脚する悪魔的なよろこびにほかならない。グリーンが神の国を出て、身を置くことになった地上の国は、悪魔の宰領する国でもあったのである。

こののち、修道生活を断念したことは、大いなる悔恨をのこす。グリーンは一九四二年十月十一日付の『日記』のなかで、「一九一九年にもし修道院に入っていたら、どうなっていたらどうか？ 私がなり得たかもしれない別の者は、今何をしているだろうか？ 彼は良き修道士であるだろうか？」との問いを発している。一九三八年六月二十三日には、「私は聖者になりたかつた。(…)私は、自分がなりたかつた人間の傍らを、たえず通つていくのを強く感じる。そして私がなりたかつた人間は、今も存在しつづけている。彼は存在し、悲しんでいる。彼の悲しみは私の悲しみのだ」としたためている。聖者になることへの願いと、修道院に入って、修業を積み重ねることの欲求である。「私がなりたかつた人間は、今も存在しつづけている」という断定からは、一九三八年の時点での、修道士になることへの希望とともに、一九一九年四月の△大いなる拒絶▽を悔いる気持ちがほの見える。また、一九四六年九月二十三日付の『日記』において、グリーンは、こう明言している。

「私がそうである現在の人間に、私がなりたかつた人間が、いつまでも異をとなえることだろう。この二人の人間は、死ぬまで共存することだろう」。

グリーンは、自分がそうである現在の人間と、自分がなりたかつた人間とを切り離してとらえ、前者のなかに後者が異をとなえながら存在すると認定している。「私がなりたかつた人間」とは、もちろん修道士であり、聖者のことであろう。こ

こでも、この世を捨てたいという誘惑とともに、一九一九年に修道院に入らなかつたことを後悔する心の動きが看取できる。このように、後年のグリーンは、 \wedge 大いなる拒絶 \vee への悔恨の念にしばしばとらえられている。しかし一九一九年当時、グリーンは修道院に隠遁することを拒否することによって、自由を得、解放感を味わう。とはいえ、自由 \parallel 解放とは、肉なるものの統治する地上の国のただ中に投げ出されることにほかならない。思春期のグリーンの人生は、神の国から地上の国への転落の道程であると判定できる。もつとも、 \wedge 大いなる拒絶 \vee のちも、信仰そのものは保持された。けれどもグリーンの視界から、神の国がしだいに遠ざかつていくことはたしかであろう。地上の国の中央に位置することになったグリーンは、いつそう深刻な肉体・欲望の苦悩におちいるのである。

五 おわりに——他者の出現——

母親の死没後、ヴァージニア大学留学の前までの、グリーンの内的な生の歩みをたどってきた。カトリシスムへの改宗、さまざまな肉体的苦悩、そして \wedge 大いなる拒絶 \vee に焦点を合わせ、それらの分析をこころみた。思春期のグリーンは人生の岐路に立っていたと思われる。従軍時代を回想した、自伝の第二巻目は、「開かれた千の道」(Mille chemins ouverts)と題されている。しかしグリーンの行く手に開かれた道は、実際には、千ではなく、二つしかなかった。神の国への道と地上の国への道とである。二つの異なる方向に向かう道の前で、グリーンは、大ざっぱに言えば、神の国に \wedge こがれながらも、地上の国への道を行んだと論断できる。先述したとおり、母の永眠ののちのグリーンの人生の歩みは、神の国からの転落過程にほかならない。一九一九年四月の \wedge 大いなる拒絶 \vee は、もはやあともどりできないほど、地上の国の道をすすんできたことを証している。そして自伝の後半の『遙かな土地』および『青春』で明示されるように、今後のグリーンを待ちうけるのは、地上の国での、ますます深化していく肉の苦悶なのである。

さいごに、グリーンの間人間関係についてふれておきたい。子ども時代のグリーンは、他者から隔絶したところで、孤独感をつのらせていた。母の亡きあと、グリーンを意識を占める他者は現われたのだろうか。彼が誰かに恋愛感情をいだくことはあつたのだろうか。この疑問を解いておきたい。自伝によれば、思春期のグリーンは若干の人たちに執着している。『夜明け前の出発』では、リセ時代の級友のフレデリックへの執着の気持ちだが、『開かれた千の道』では、たとえば、従軍時代に知りあつたテッドへの思いが表白されている。しかしながら、これらの感情はグリーンのみならず、これらの感情はグリーンのみならず、正真正銘の愛として自覚されないで、彼の人生に大きな影響をおよぼしてはいない。図式的にいえば、アメリカ出発までのグリーンは、他者の不在のなかで生きてきたとみなせよう。

とはいえ、このように孤立した状況のなかで、グリーンが他者（の存在）を意識するといった出来事が偶発している。一九一七年の七月のある日、移動野戦病院の運転手としてアルゴンヌの前線に向かうために、レヌアール通りの軍施設にかよつていた頃、グリーンは制服姿のひとりの青年に突然話しかけられる。青年はグリーンに、カフェに行こうと誘い、ためらつているグリーンを腕をいきなりつかんで、グリーンをカフェに連れて行く。カフェの中に入つてからのことは、『夜明け前の出発』において、次のように回顧されている。

「彼〔グリーンをカフェに誘つた青年〕は私に何も言わなかつた。運ばれてきた飲み物を押しのと、テーブルの上で腕を組んで、顔をわずかばかり私の方へ突き出した。そのとき私はとても大きな気詰まりを感じた。二人の沈黙がさつぱり理解できなかつたので、何か言おうとした。だが陳腐な言葉は声にならなかつた。その物言わぬ顔の美しさが私の胸を打つた。その顔はあたたかでも永遠に私のこころのなかに身を落着けたがつていて、かのようにであつた。というのも、顔は完全に不動のままであつたからである。ただ青い目だけが生き生きとしていた。私はその目のなかに、不意に悲嘆と呼びかけのようなものを読みとり、それらは私を深い不安で満たした。おそらくその不安の何かが私の表情に現われたのだろうか、青年は急に立ちあがり、支払いをすませ、私を連れて店を出た。河岸までくると、彼は△△

longi) (さようなら) と言いはなち、姿を消した」(V、八七四頁)。

この一節では、カフェに入った二人が、気詰まりな沈黙のあと、店を出、別れたことが語られている。いったい、二人の出会いと別れはいかなる意味をもつのだろうか。この問いに答えるためには、青年の目に突如として浮かんだ、「悲嘆と呼びかけのようなもの」に特に注目する必要がある。この見知らぬ青年は、グリーンに愛の情熱をいだいたために、グリーンをカフェに誘ったのだと思われる。「悲嘆」(une détresse) は、自らの愛の不可能性への予見、自己の愛の情熱が共有されないことの直観に由来する感情であろう。△悲嘆▽と訳した détresse には、△苦悩▽の語義もあることを付言しておきたい。「呼びかけのようなもの」とは、自らの愛の不可能性を予知しつつも、自己の愛を理解してほしいという願いが現われ出たものと解することができる。「その顔はあたかも永遠に私のこころのなかに身を落着けたがっているかのようであった」という印象も、この願いとの間連で把握しうる。けれども青年はグリーンの表情に、「不安」(malaise) の感情を読みとる。malaise には△不快感▽の意味もあることを念頭に置くと、青年が一言も言葉をかわすことなく、内心の思いをなんら伝えることなく別れた理由が了解される。青年は、自分の愛がまったく受け入れられないことを痛感したがゆえに、グリーンの視界から立ち去るのだ。グリーンはこのあと、こう思いをめぐらせている。

「どうして青年はあんなにも悲しげな様子をしていたのだろうか？ この問いに私は答えることができなかつた。何も言わなかつた、その謎めいた人間に、できることなら私は話しかけられるようになりたかつた。今日、この青年が、私を私自身から抜け出させ、他者と呼ばれるこの見知らぬ人もまた、自分と全く同じように存在するのだということを知らしめた、最初の人間たつたと、私はほとんど確信している。それは、私の人生のなかに、隣人が出現したかのようであつた」(V、八七五頁。強調はグリーン)。

グリーンは、カフェに誘つた青年が、「私を私自身から抜け出させ」、△他者▽の存在を知らしめてくれた最初の人間だと見定めている。要するに、自分の人生のなかに出現した最初の他者だと認識している。この認識はもちろん、青年との出会

この時点のものではなく、自伝執筆の時点のものである。では、どうしてこの青年が△他者▽となりうるのだろうか。ヴァーヂニア大学留学時代に、グリーンもまた、不可能な愛の情熱に煩悶することになるからである。この青年は、グリーンがたどるべき運命を先取りするかたちで告知している。この意味において、青年はグリーンにとつて他者∥隣人となりうる。あるいはまた、青年は苦悩によつて自己の存在を教示した最初の人間である。しかもその苦悩はグリーンじしんの存在と密接に関連する。グリーンは自分じしんのせいで、青年が苦しんでいることを本能的に察した。青年は苦しみを身をもつて示すことによつても、△他者▽が「自分と全く同じように存在する」ことを教えた。この青年はグリーンの人生において、転換点をしるすほど重要な存在ではない。しかし青年との出会いは、他者の不在のなかで生きてきたグリーンに、他者（の存在）を発見させたという点で、大きな意義をもつ。前述のごとく、グリーンもまた、ヴァーヂニア大学留学時代に、この青年と同じように、不可能な愛に呻吟することになる。留学時代をあつかった自伝第三卷『遙かな土地』を検討することを、次の課題としたい。

註

- (1) 拙稿「ジュリアン・グリーンの出発」(1) (3)、山口大学「独仏文学」第二十二号・第二十三号、二〇〇一年二月・十二月、山口大学「文学会志」第五十一卷、二〇〇一年二月を参照。
- (2) 『夜明け前の出発』は、プレイアード版テキストでは、約三三〇頁より成る。
- (3) △ √は大文字で書かれていることを示す。
- (4) J. Uijterwaal: *Julien Green, personnalité et création romanesque*, Van Gorcum & Cie, Assen, 1968, p.38.
- (5) グリーンの母親もまた、「けつして嘘をついてはいけないよ。嘘をつくことは奴隷の罪なのよ」(「人間に必要な愛」Ⅵ、八九九頁)と言つて

いた。

- (6) グリーンが父親に、修道士になる希望を打ち明けたのは、ようやく一九一九年一月になってからである。
- (7) 強調(傍点)は引用者。以下、「強調はグリーン」とことわらないかぎり、強調(傍点)は引用者によるものとする。
- (8) 父方の祖父、チャールズ・グリーンは一八三〇年、英国からアメリカ南部に移住し、綿を栽培するプランテーション(大農場)を経営した。
- (9) プレイアード版の註釈者、ジャック・プチによれば、この作家はシュラン神父(二六〇〇—一六六五)のことである。シュラン神父は数多くの霊的書物を著わした。
- (10) 『残された日々』、『日記』第九巻、一九七〇年三月八日、V、五五六頁。
- (11) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Mille chemins ouverts*, *Œuvres complètes de Julien Green*, Bibliothèque de la Piétade, Gallimard, V, p.1628.
- (12) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三九年日付なし、IV、五一二頁。
- (13) 同右、五一二頁。
- (14) 『暗い扉の前で』、『日記』第三巻、一九四〇年三月三十日、IV、五七〇—五七一頁。
- (15) グリーンは「マタイによる福音書」第七章第十三節・第十四節、すなわち、「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいつて行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」という記述を踏まえて、引用した文章を書いたと推測される。
- (16) 『暗い扉の前で』、『日記』第三巻、IV、六八八頁。強調はグリーン。
- (17) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、IV、四七〇頁。
- (18) 『亡霊』、『日記』第五巻、IV、九四一頁。